

IoT利用空気監視サービス「ジビオット」

グリーンブルー-国内外で浸透戦略、着々と

する環境測定分析を担う国内公共セクションの深耕を目指す。計測としての信頼性と、公定法と比較した価格優位性を打ち出し中長期的に浸透させたい考えだ。ジビオットを巡り国内外で、両にらみの戦略を進める同社・三阪氏に話を聞いた。

ジビオットは高精度のセンサーで計測し、データを大気汚染防止法など公定法の定める測定器による結果と比較検証した上で提供する。「高価な公定法測定器よりも安価に設置・運用できる」(三阪氏)に加え、数値をそのまま表示する製品・サービスと異なり、グリーンブルー内の専門チームによりデータの妥当性を評価するプロセスを経るのがポイントだ。

計測現場に対応したライオンアップも充実させた。屋外定点の大気汚染監視はもちろん、室内空気質監視や、新型コロナウイルス感染症対策で需要が拡大した室内CO₂監視などの各種デバイスも開発済



屋外定点での計測を進めている



慶應義塾大学の講義室内に設置されたジビオット

み。さらに自動車やドローンに搭載するタイプや、歩行しながらの大気環境調査にも対応させている。

使い勝手の良さが評価され、東アジア酸性雨モニタリングネットワーク(EANET)が構築・検討している低コストセンサー(LCS)を用いたハイブリッド大気監視ネットワーク(HAQM-N)への採用も検討されている。主に東南アジアがフィールドとなる。観測サイトの中心部に公定法測定器を設置し、その外周をジビオットで取り囲むというネットワーク。データ精度と導入・運用コストの低さが評価された。公定法が決まっておらず、これから観測サイトを設けようという国々も積極的に考慮して「国々も積極的に考慮して「現政府や研究機関から引き合いが多寄せられていく」という。

海外市場の開拓と合わせ、国内でも実績を積み上げつつある。慶應義塾大学が立ち上げた「地域IoT情報力コンソーシアム」に参加し、湘南藤沢キャンパス内の各講義室にはCO₂監視装置のほか、屋外に大気汚染監視装置を置いた。現在もキャンパス内でリアルタイム(1分間隔)の大気・気象観測を実施しており、近隣の大気汚染監視局と近似したデータを得ているという。

国内外でジビオットの運用を進め、海外実績の「逆輸入」を実現した先で、国内公共セクションの抱える構造的な困難をサポートする構想を持つ。「日本はアジアでもいち早く公定法による観測網を設け、データ測定を進めてきた。近年ではほぼ全ての環境基準をクリアしており、主に残る項目は光化学オキシダントだけとなっている。自治体によっては観測ネットワークの合理化を進め、測定局を減らしはじめているのが現状だが、今後の国内の大気汚染防止対策を考える上で一定のリスクは避けられないのではないか」と指摘する。中長期的に見ればどのような経路で化学物質が排出されるようになるかは完全に見通せないが、一度廃止した観測点を改めて構築するというのは困難だろう。そこで一測定器を代替する計測手段として、例えばジビオットのような高性能・低コストのサービスが選択肢として考えられるようになるればベターではないかと話し、さらなる国内市場への浸透に意欲をうかがわれた。

測定分析業を手掛けるグリーンブルー(横浜市)はグローバルに販路を広げるIoT利用空気監視サービス「ジビオット」(ジビオット)の国内需要の掘り起こしに取り掛かっている。官庁・研究機関や他企業と連携することで技術力を確かめながら、海外では東南アジアに打って出て運用実績の「逆輸入」(同社・三阪和弘取締役)を狙う。予算・人員の削減で苦心